第十四章　デジタル人

「政治資金収支報告書をオンライン申請する政治家はまずいません。デジタル庁長官ですら自分の政治資金報告書をペーパーで提出しています」

山本が問題提起する。テレビ画面では分厚い収支報告書のファイルをマスコミ関係者が閲覧する映像が流れる。

「誰がそんな人を長官に任命したんじゃ？　馬鹿げておるぞ」

「デジタル化した報告書を総務省のホームページで公開すれば誰でも見ることができます」

このごろ政府や政治家のすることなすことに懐疑的になっている田中がうそぶく。

「どうせ使い勝手が悪いとか屁理屈こねて国民に見られると困る政治家たちがあえてデジタル申請しないんだろう」

山本が手を打つ。

「大正解。それに不思議なことにオンライン申請は法律上努力義務なの」

「法律を作るのは政治家じゃから、都合の悪いことはやらんのじゃ」

「国民をバカにしている。結局政府を信頼できないから国民はマイナンバーカードを作りたがらない。原因を作っているのは政府だ」

「月に百万円も支給される『文書通信交通滞在費』の使い道もいい加減です」

＊

「子ども未来給付金をクーポンで支給する場合は外注するらしい。外注せずに公務員がすればいいのになぜなんだ？」

頷きながら山本が否定的に応じる。

「自分たちではできないの。やったことがないから愚策を作ってしまうの。民間企業も同じようなものよ。『カムカム・ＡＴＭ事件』でも分かるように銀行のコンピュータシステムはすべて外注。『当行の金融サービスシステムは完璧です』なんて言っているけれど自分たちで対処できない」

「許認可企業だから政府と似たり寄ったりなんだ」

「今の銀行は金融業ではなくコンピュータサービス業です。莫大な資金をコンピュータシステムに投じています。つまりコンピュータ装置産業です。でも自前で人材を育ててない。だから、事故が起こるとどうしようもないのです」

「饅頭で食中毒になっても売った饅頭屋が『自分のところで造っていないから原因がよく分からない』と言うのと同じか」

「なるほど」

大家が納得する。

＊

「いつの間にか日本には自前でモノを造る企業がなくなりました。昔は垂直分業と言って、極端な話ネジ一本まで自社生産していました。ところが水平分業で外部の企業に製造させた部品を使って組み立てるようになりました。その究極の生産方式をとっているのがスマホで有名なオレンジ社で、設計だけして部品はおろか組み立てもすべて外注します。しかし、このやり方では一つの部品が滞ったり欠陥があったりすると製造が滞ったり、欠陥製品ができたりします」

頷きながら聞いていた田中が結論じみたことを言う。

「どの生産方式も長所短所があると言うことか。欠品になったり欠陥品ができたりしないようにするには理屈ではなく現場でよく考えることなのかなあ」

山本が反応する。

「なるほど」

＊

「現場で試行錯誤して考え出した方法を束ねる。それを具体的な形にまとめ上げるようにイニシアティブを取る。そのような環境を造るのが最高責任者の責務じゃ。情けないことにこんな基本的なことを忘れたサラリーマン社長が多くなってしもうた」

田中の考え方に刺激されたのか大家がノリノリになる。

「『デジタル化』と言っていますが、アナログを捨てて何でもかんでもデジタル化すればいい

とは限りません。いいところをミックスさせなければならない。その組み合わせが大事。なぜなら人間の五感は究極のアナログセンサーだから。でも脳は意外とデジタルなのです」

まったく別人に見える田中に山本が目を見張る。

「人間はアナログ人。でも進化した脳をうまく使えばデジタル人にもなれる。そういうことなの？」

「そうです。デジタル庁を作る前にアナログ庁を作るべきです。徹底的にアナログの長所短所を分析してからデジタル化する。そういう基本路線を構築してなければならないのに、誰かが『これからはデジタル』『デジタルで後れを取っている』と言うだけでアナログをバカにする。そうではなく人間性を無視しないデジタル化を考えなければならない」

「それにじゃ。デジタル化すれば大量にデータを盗まれる危険性があるぞ」

大家も負けじと発言すると田中が反応する。

「ついこの間まではコピーしようとすれば手書きするしかなかった」

「写経じゃな」

「そうです。書き写しながら仏教の神髄に迫る高度なアナログコピー技術です」

「そうか。写しながら理解する。アナログはすごいのじゃ」

山本は田中と大家の弾んだ会話に感心するが熱気が強すぎて口を挟めない。

「最近と言っても百年も経たないほど前の話ですけれど複写機が発明されてコピーが簡単にで

きるようになった。はじめは一枚しかコピーできなかったけれど」

「『青焼き』と言うコピー機じゃ」

大家が得意げに答える。

「感光紙に焼き付ける方式ですから一枚しかコピーできない。感光紙だから何年かすると退色して読めなくなってしまう。それでもいちいち写さなくていいから便利でした。よくよく考えてみると何年かすると消えるから情報が漏れません。昔『スパイ大作戦』というテレビ映画があったそうです。工作員に作戦内容を伝え終えると『このテープは自動消去される』と言う音声が流れてテープレコーダーが潰れてしまうという有名なシーンがあったらしい」

ここで山本が頑張る。テレビにそのシーンが現れる。

「懐かしいのう」

大家が感激するが田中は頷くだけで次の話を始める。

「コピー機もデジタル化されて何枚でもコピーできるようになりました。複数の原稿を大量にコピーできて製本もできます。でも今はもっとすごいのです」

「やり方はともかく、わしでも分かる。コンピュータに蓄えられた大量のデータは瞬時にコピーできるのじゃ。その内容に関係なく大量に盗まれる事もある。とりあえず盗んで価値があればあとで脅迫する」

「セキュリティ、セキュリティとうるさく言うけれど何かおかしい」

ここで大家は黙る。

「本当に重要なデータってどれほどあるのでしょうか。大事なモノって大昔は蔵に保管していた。でもデータとしてはどれほどの量があったのでしょうか。データは量が多いほどいい。大量のデータを分析すれば傾向や発見に繋がる。データを盗んでも猫に小判かも。でもそのデータを分析したり加工することができる者にとっては宝の山。そこが問題」

やっと大家が口を開く。

「データのこと、その意味を考えずに軽く見ていたがそうではないのじゃな。分析したり加工したりする技術がなければ意味がないのじゃ」

「たとえばそこそこの文章データ。目次や脚注や索引がなければ書いてある内容を立体的に理解できないし後で分析もできない」

「確かに一読してからいいことが書いてあったと思ってもどこに書いてあったかを探すのには索引が大事じゃのう」

「そうなんです。索引や脚注のない本が多いです。著者や出版社に力量がないのでしょう。もちろん小説なら目次も脚注も索引も不要かも知れません。でも論文となるとそうはいきませんね」

大家が頷くとテレビの中で山本も頷く。

「目次は始めに、脚注はその章末に、索引は終わりに配置されます。なぜこのようになってい

るのか僕には分かりません」
大家がいったん首を傾げたあと目次について感想を述べる。
「目次はトップにあげるべきじゃろ。前文があればその次になるかもしれんが」
「僕は目次も脚注も索引も本の真ん中当たりのページに置くべきだと考えています」
「？」
大家と山本が理解できない状況を共有する。
「本の先頭に目次を置いても本の内容は理解できません。読み出して徐々に著者がめざす展開に興味が出てきます。そのときにパッと目次ページを開けることができればありがたいのです」
「目次は頭にあるからすぐ探せるぞ」
大家が首を傾げる。
「確かにそうですが、意外と本は先頭や最後の方というのは開けにくいものなのです」
田中は棚から本を二冊取り出すと一冊を大家に、もう一冊をテレビの前にかざす。山本の手が伸びてその本を受け取る。
「不思議なテレビじゃのう」
厚みが一センチそこそこの新書版の本だ。ページ数で言えば二百ページほど。少し違うのは真ん中に薄いピンク色の紙が十数枚程度挿入されている。
「この部分に『目次』や『脚注』や『索引』があります。パッと開くことができるでしょ」

「なるほど。確かに開きやすいのう」
山本もその部分を開く。
「メモページもあるわ。真ん中だとメモしやすいわ。ちょうど書きやすい厚みがある」
「田中さん。たいしたアイディアじゃ。目次は先頭、索引は一番後ろが定番じゃが、発想の転換じゃな」
「そこまで褒められるとは思わなかったなあ。特許を取れば資産家になれるかなあ？」
山本が一呼吸置いてから答える。
「でも厚みがない電子本はどうなのかしら」
田中は資産家の道を諦める。